

# カッパドキア教父の婚姻観

*The Cappadocian Fathers: On Marriage*

海老原晴香

## はじめに

本稿では、キリスト教教父学や教義学の分野でいわゆる「カッパドキア三教父」と敬意をもって称される人物たち、すなわち、共住型の修道生活の創設者とされるバシレイオス (c. 328-c. 379)、甘美な詩作品などで名高く、神学的思弁への貢献から伝統的に「神学者」と称されてきたナジアンゾスのグレゴリオス (c. 329-c. 389)、そしてキリスト教的神秘思想と人間論確立に貢献した立役者と評されるニュッサのグレゴリオス (c. 330-c. 395) の婚姻観に焦点を当てる。彼らは、それぞれにアプローチの仕方やスタイルの違いはあれど、迫害期を経てキリスト教が国教化されたローマ帝国にあって、キリスト者としての理想のあり方、生き方とはどのようなものか、神に嘉され福音的に生きるとはどういうことか、を、生涯の終わりまで探究し続けた人物たちである。彼らの奮闘は各々、共住型修道制の規則・指針整備と制度の完成、キリスト者の霊的な生き方の理想を裏付ける神学的理論の展開と根拠の明示、四世紀の教義論争における三位一体論の発展、および、神性と、神に対する人間のあり方をめぐる神秘思想の発展に結実した。いずれの奮闘の道行きにあって、キリスト者の完全性を問い求める視点は共通し、そこで追求された霊的価値の一つとして、純潔・処女性が挙げられる。

初期のキリスト教社会においては、純潔・処女性の理解と、その具体的実践の一つとして、いわゆる「エンクラティスム」と呼ばれる動きが一定の影響力をふるっていた<sup>1</sup>。名称の由来となったギリシア語 ἐγκράτειαは、パウロが「霊の結ぶ実」の一つとして挙げた「節制」<sup>2</sup>を意味するが、「エンクラティスム」の動きにあっては、とりわけ性的な側面での禁欲的態度の徹底が重視された。性的禁欲の徹底と浄化志向、そして肉体への蔑視が絡み合い、三世紀までに婚姻と生殖を性的な放縦として拒絶する方向性をたどっていったこの動きは、特定の明確な宗派を結成したというよりは、グノーシス主義やマルキオン派、モンタノス派など、過度の禁欲的熱狂グループとも言える集団に多かれ少なかれ共通して見られる傾向となっていた。二世紀のキリスト教護教家教父タティアノス（c. 120-c. 176）はこの傾向を受け入れ、創世記におけるアダムとエバの罪は生殖を通じて人類に伝えられ広まっていくとし、彼が影響を与えた故郷シリアの教会にあっては、受洗が生涯にわたる独身の誓いに等しいものととらえられていたようである<sup>3</sup>。

こうした動きが未だ人々の思想や生き方の選択に影響を色濃く残す時代にあって、カッパドキア三教父は婚姻にいかなる理解を持っていたのだろうか。以降、彼らが婚姻についてどのような文脈で何を語ったか、見ていきたい。

## バシレイオス

バシレイオスの著作に触れる限り、神を第一とする敬虔な生き方について論じるに際して、独身者か既婚者か、という区別は必ずしも論争の焦点になっていない。彼にとって、キリスト者としての最も重要な使命は、聖なる洗礼を授かった者としての自覚を常に抱き、日常のあらゆる場面で福音にかなった生き方をするというただ一つのこと

集約され、独身者の場合の召命はこう、一方で既婚者の場合の規範はこう、といった厳密な区別を語る箇所は見当たらない。キリスト者の靈性は、独身既婚にかかわらずキリストにおいてキリストと共に生きることに尽きる、ということである。

バシレイオスによる修道的生活に関する著作群（いわゆる「アスケティカ」Ascetica）の一つであり、修徳的な生活を送るにあたっての諸原則を五十五項目にわたって解説した『修道士大規定』<sup>4</sup>には、次のような言及がなされている。

キリスト者の生活は一種類しかない。ただ一つの目標、神の栄光を抱くのみである。主へと導かれる道は一つしかなく、主への道行きを進む者は皆相互に仲間であり、生き方に関してただ一つの契約に基づいて歩みを進めるのである<sup>5</sup>。

バシレイオスにとって、洗礼を授かって聖体拝領にあずかる者は、誰もが等しく福音の道を選びとって歩もうとする者である<sup>6</sup>。ここには、ガラテヤ3：28で「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたが皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」と語ったパウロのメッセージが響いている。

こうしたバシレイオスの靈的修道的生活に対する基本的な思想と態度を確認したうえで、婚姻に関して言及している以下のテキストにも目を向けてみたい。

それでは、福音は妻帯する者にもあてはまるものであるとあなたは考えるだろうか。見よ、われわれは皆、修道者も既婚者も、福音への従順について報告するのだからなければならない。婚姻を選

びとった者に対して一つだけ認めること〔συγγνώμη〕と言えば、女性への欲望や性交渉といったことに関して自己抑制が効かなくなる〔ἀκρασία〕だろうということである。しかし、他の命令については全ての者に同等に規定され、逸脱する者は誰にも危難が満ち溢れている。というのも、キリストが御父の命令として福音を述べ伝えた時、彼は世界に向けて語ったのである。弟子たちから個別に問いかけられた時、彼は自らの応答の中で明確にこのことを証言した、「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ」<sup>7</sup>と。

妻との共同生活〔κοινωνίαν γυναικός〕を選んだ者は、世俗を甘受するある種の権利を得たかの如く気を緩めてはならない。むしろ、苦役のまっただなか、反抗的な勢力の砦のただなかに生きることを選んだのだから、救いを得るために一層の労苦と用心が必要になる。昼夜を問わず、目の前にある罪の誘惑への欲望に向けて、あなたの感覚は駆り立てられるのである。

福音の教えを守ろうという多大な苦闘なしに、悪との闘争を回避したり、悪への勝利を獲得したりすることはない、ということをお肝に銘ぜよ。闘争の最も激しい所に置かれた者がいかにして敵（「敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています」<sup>8</sup>）との争いに勝てるというのか。ヨブの物語から学ぶ通りである。敵対者との闘争を拒むのなら、敵対者が存在しない別の世界へ逃げ込むがよい。そこでは福音の教えに危難を及ぼすことなく敵対者との衝突を避けて安心できるだろう<sup>9</sup>。

ここには、既婚のキリスト者へのバシレイオスの見解が明確に記されている。受洗した者は独身既婚にかかわらず、完全に福音が告げる

ことに従うべき召命にあずかっていること、それゆえ例えば異性への欲望に関して、既婚者の状況に譲歩しつつも、逸脱は容認されない、ということが言及されている。婚姻を表現するに際してκοινωνία<sup>10</sup>を用いている（「妻との共同生活（κοινωνίαν γυναικός）」）点は、婚姻そのものを性的放埒と結び付けるようなとらえ方とは対極的な、バシレイオスの信仰共同体的な視点を示すもので、注目に値する。

## ナジアンゾスのグレゴリオス

ナジアンゾスのグレゴリオスは、イエスが離縁について人々に語るマタイ19：1-12を解釈する講話の中で、キリスト者の婚姻に言及している。以下の引用箇所では、マタイ本文の解釈に入る前にまず、当時のローマ帝国社会で当たり前に見受けられた男女格差の傾向を批判し、パウロが妻と夫の関係性について語るエフェソ5：21からの箇所を取り上げながら、キリスト者にとって婚姻（創世記2：24に従い、男女二人が一体となること）が、キリストによる救いの観点からも互いの尊厳を認め、仕え合うことであるとの見解を示している。

純潔ということに関し、ほとんどの男性が悪意を持っており、また彼らによる法律は不平等で不規則であると私は見ている。なにゆえに、彼らは女性を拘束しながら男性を甘やかすのか。女性が夫の寝床に対して悪を犯すと姦淫の罪となり、この法の罰は非常に厳しい。しかし、妻がいるのに淫行を犯した夫には、何の咎めもないのか。私はこの法を受け入れない。私はこの慣例を承認しない。こうした法律を作ったのは男性、そして彼らの法は女性たちに対してより無情なのである。

自分自身が守ってもいないのに、どうして相手に純潔を要求で

きるのか。自分自身が注意を払っていないことを、どうして相手に求めることができるのか。自分自身と同じ身体にあずかる者を、どうして不平等に法で規制することができるのか。もしも、より悪意を持って尋ねるとすれば、そう、女性は罪を犯した。しかし、アダムも同様である。蛇は彼ら両方を騙したのである。ここでどちらかの罪がより重く、もう一方が軽いということはない。どちらがより良いか、あなたは判断したいのか。キリストは、自身の受難によって両方を救う。彼は、男性のために肉体を得て降誕したのだろうか。女性のためにも、彼はそのようになった。彼は、男性のために死んだのだろうか。女性もまた、彼の死によって救われた。彼は、「ダビデの子孫」<sup>11</sup>と呼ばれたので、男性が崇められると考えるのかもしれない。しかし、彼は聖母、女性から生まれたのである。聖書には、「二人は一体となる」<sup>12</sup>と語られている。だから、一体となった肉体は同等の誉れを受けるのでなくてはならない<sup>13</sup>。

グレゴリオスは如上の直後の文章でエフェソ 5 : 32 (「この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです」) にも触れ、キリスト者の婚姻と、キリストと教会との結びつきの神秘との関連付けを示唆する。そのうえで、姦淫の事実が認められない限り、一度婚姻によって結びついた妻と夫との気まぐれな離婚はゆるされない、と主張している。

ここで御言葉は再婚を非難しているのだ、と私は考えている。もしも二人のキリストが存在したなら、二人の夫と二人の妻がいたのかもしれない。しかし、キリストが一人であるのなら、そして教会の一つの頭であるのなら、〔妻と夫は〕「一体となる」ので

あり、二人目〔の妻と夫〕は拒絶される。そしてもし二人目を避けるなら、三人目についてはどう言えるだろうか。一人目とは法であり、二人目は耽溺であり、三人目は逸脱であり、それ以上になると野卑で、そこまで邪悪なこととなると、ほとんど例がない。今や、ローマ法はどのような理由であっても離婚〔τὸ ἀποστάσιον〕を許可するが、キリストはいかなる理由があってもゆるさない。彼も、姦淫の罪を犯した者からは離れる〔χωρίζεσθαι〕ようにと譲歩はしているが、その他のあらゆる事柄においては、彼は耐えるよう命じる。姦淫の罪を犯した者から離れるべきである理由は、その者が子孫を墮落させるからで、一方その他のあらゆる事柄においては、耐え忍ぼうではないか。むしろ、婚姻のくびきを受けた者は皆、耐え忍べ<sup>14</sup>。

ここでは実は、法的に婚姻関係にある配偶者が存命である場合に、その婚姻関係を断ち切って（離婚して）再び別の者と婚姻関係を結ぶことが、キリスト者にとってよいことか、といったことが議論されているというよりは、配偶者が逝去した際に再び別の者と婚姻関係を結ぶことをどう考えるべきか、という関心から見解が展開されている。キリスト者にとって、死そのものは永遠のいのちの歩みにおける過程の一つに過ぎない、との信仰理解も影響し、グレゴリオスは神が結び合わされた最初の婚姻の聖性を重視する。ローマ法において、離婚すること、そしてその後別の相手と再婚すること自体は法的に認められた権利であったが、グレゴリオスがここでマタイ19：1-12でのイエスとファリサイ派の人々とのやり取りで用いられている「離縁する（ἀπολύειν）」の語をそのまま用いずに「離れる（χωρίζεσθαι）」と表現している点も興味深い。

神の聖性と結びついた婚姻の積極的な理解、という観点からは、グ

レゴリオスは以下のような見解も残している。

婚姻生活の絆に関心がある者は、人間の世代と血統に関する法則に従う。この法則とは、最初のアダムと彼の脇腹からの女性とを結びつけた際に、永遠なる父の御子が定めたもので、人間は人間の子孫として生まれ、世代を通じて穀物の穂のように子孫のうちにとどまる。この法則と相互愛を実行するために、われわれは互いを支え合う。なぜならわれわれはこの世界に生まれ、この世界の最も古い法則に従い、その法則とは神からのものでもあるのだから……

賢明な婚姻が人類にもたらすものを見よ。親愛なる知恵を教え、世界で、海の中で、天の下で起きていることの深みを探究してきたものとは何か。街に法をもたらし、その法の前でさえも街を築き、芸術を見出してきたものとは何か。公共の広場を、家々を、闘技場を満たしてきたものとは何か。戦時下に軍の必要を、また宴の時には食卓を満たしてきたものとは何か。香に満たされた聖堂で、合唱団による聖歌をあつらえてきたものとは何か。原始的な生活を緩和し、土を耕し、農業を教え、風に向かって黒船を海洋に漕ぎ出でさせてきたものとは何か。婚姻以外に、何が世界と海の湿った小道を一つに結びつけ、はるか遠くにあったものをまとめてきたというのか。

これで十分かもしれないが、私はまだはるかに高尚なものごとを歌う。婚姻を通じて、われわれは互いに両手、両耳、両足となる。婚姻がわれわれの強さを倍増させ、われわれの友に大きな喜びを、そして敵には悲しみをもたらす。配慮し合うことが、われわれの苦難を軽くする。喜びを分かち合うことは、われわれ両者を慰める。二人一致して考えることは富める者たちをより快活



にし、他方でそうした調和は富みのない者たちをさらに励ます。婚姻は、両者にとっての節度の鍵であり、欲望を調和させるものであり、かけがえのない友情のしるしであり、……経験したことの無い者には味わえず、手にすることができない閉じられた泉からのユニークな飲みものである。……というのも、婚姻は神から人間を遠ざけず、むしろ神にずっと近づけるのである。われわれを婚姻へと引き寄せるのは、神ご自身なのだから<sup>15</sup>。

特に引用した最終段落の著述は、ナジアンゾスのグレゴリオスが、前項で見たバシレイオスに比べさらに踏み込んで、キリスト者としての修徳に資するものとしての婚姻理解を持っていたことをうかがわせる。キリスト者の婚姻は、神の導きへの人間の応答であり、地上におけるキリストを頭とした共同体の実現である、との理解である。

## ニュッサのグレゴリオス

ニュッサのグレゴリオスは、長兄のバシレイオスを筆頭とした周囲の人々からは、将来聖職に就くことを待望されていた。しかし、当時ユリアヌス帝治下で頂点を迎えていた異教的・多神教的文化の理想・人間観に、より親近感を持ったグレゴリオスは、結婚し、修辞学教師となる道を選んだ。一方、パレスチナ地方及びエジプト地方の隠修士の生活を視察し、修道的生活を送る理想を抱いて358年に故郷であるポントス地方のアンネシ州（黒海南岸地域）に戻ったバシレイオスは、既に朋友であったナジアンゾスのグレゴリオスと共に弟のグレゴリオスも自身の活動の協力者としようとしたが、失敗に終わったようである<sup>16</sup>。

370年にカイサレイア主教となったバシレイオスは、その当時実施されていたヴァレンス帝によるニカイア信条派の人々への迫害を危惧し、

信頼できる人々を周囲に置くことを意図して、まずナジアンゾスのグレゴリオスを小村サシマの地の主教とした。そして372年には弟グレゴリオスをニュッサの主教に任命し、反アレイオス派の地盤固めを図ったとされている<sup>17</sup>。しかし、ニカイア信条に忠実な主教を一掃しようと企てるヴァレンス帝により、374年、グレゴリオスは教会資金乱費の嫌疑をかけられ、さらには主教として選出された経緯自体の正当性をも疑われて追放されてしまう。この試練を経て、彼の心情に変化が起こり、以降、バシレイオスがカッパドキア地方に修道院制を確立していくための援助を、とりわけ思索的側面において積極的に行うようになった。この頃までに、グレゴリオスは最初の著作とされる*De Virginitate* (『純潔について』)<sup>18</sup>を著わしたとされており、この著作において彼の婚姻に関する修道的な観点からの思索に触れることができる。

神性なる実在へのこだわりと希求は、何よりも優先されなければならないが、知恵と節度をもって生きていけるのであれば、婚姻の重みは軽蔑されるべきではない<sup>19</sup>。

グレゴリオスは*De Virginitate* 7において、本稿の冒頭で触れたような、婚姻を異端的で馬鹿げたものとして軽蔑する人々を拒絶し、創世記1:28「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物すべてを支配せよ』」を参照して、婚姻に神聖なる祝福が授けられていること、また人間存在が婚姻の実りであることを示している。実は、引用箇所在先立つ*De Virginitate* 3および4においてグレゴリオスは、実際の結婚生活に伴う困難、配偶者に先立たれた後の生活の不便さ、出産のリスク、子どもの育児に伴う不安についてなど、婚姻に関してかなり消極的な記述を連ねており、一読すると、純潔をこれらの煩わしさからの

解放と称揚して婚姻を否定し、独身を貫くよう主張していると理解される向きがある。しかし、後続の章を読み進めていくと、グレゴリオス自身の婚姻理解は決して否定的なものでなく、むしろ*De Virginitate* 3および4において語られた事柄のトーンが婚姻に対する行き過ぎた非難を示したものであったことが、自身によっても述べられている<sup>20</sup>。純潔の崇高な意味について論じるこの著作にこうした見解を示していることで、グレゴリオスが純潔と婚姻を背反するものとしてとらえていないことがわかる<sup>21</sup>。

グレゴリオスの婚姻理解は、人間の霊的な生き方や靈魂と神との一致に関する彼の思索にも、間接的かつ比喩的ながら、非常に示唆に富む形で反映されている。既に*De Virginitate* 20において、人間の靈魂と神との神秘的一致が言及され、その一致は「霊的婚姻πνευματικός γάμος」<sup>22</sup>と表現されているが、とりわけ最晩年に執筆された旧約聖書雅歌の解釈講話である『雅歌講話』<sup>23</sup>では、著作全編にわたり、夫と妻の一致と愛を神と靈魂との神秘的一致の霊的解釈の出発点としている。もともと雅歌自体、主な人物として花婿と花嫁が登場し、この花婿と花嫁が互いに愛を謳い合う詩の形式で著わされており、グレゴリオス以前の教父たちもまた、この花婿と花嫁の一致の喜びと別離の悲しみ、切なさの描写に、神と自分たちとの関わりを重ね合わせながら、解釈を連ねてきた歴史がある。オリゲネス (c. 184-c. 254) に端を発し古代から中世にかけて、花嫁は個人の靈魂主体であると同時に教会共同体をも表わす、という解釈が継承されていくこととなる<sup>24</sup>が、グレゴリオスはこの系譜にあって、婚姻と、夫婦の一致の原動力たる愛に、神と人間並びに教会共同体との一致、そして相互愛に通ずる神聖な尊厳を認めていたということができらるであろう<sup>25</sup>。

## むすびとして

キリスト者の完全性が徹底的にイエス＝キリストに倣うことであるとするのならば、婚姻が否定され、キリスト同様生涯独身を貫く生き方が奨励されることは無理もないことであつたであろう。エンクラティスムのような、婚姻を純潔と対立するものとして蔑視する生き方の実践は、ある意味でわかりやすい。そうした動きが一定以上の支持者を生み出した背景には、キリスト者としての理想像を語り、また自らのキリスト者としての生き方の正統性や優越性を主張するうえでも都合であつたという事情が、少なからず影響しているであろう。こうした背景にあって、バシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスは、独身か婚姻か、いずれが善か悪かではなく、そもそもキリスト者としてのあり方とは何を本質的な基準として問い求められていくべきなのか、という問題意識を持っていたことがうかがえる点に注目すべきである。

本稿で扱ったカッパドキア三教父による限られた文献からもわかることは、彼らが婚姻をただちに純潔を損なうものとは決してみなさず、また神から離れる行為であるとも考えていないということである。バシレイオスは婚姻を *κοινωνία* の語を用いて表現し、ナジアンゾスのグレゴリオスは婚姻が人間を「むしろ神にずっと近づける」ものであると述べ、ニュッサのグレゴリオスは婚姻を神と人間との神秘的的一致へと導く霊的解釈の出発点とする。ニュッサのグレゴリオスに至っては、とりわけ『雅歌講話』において、男女間の熱情的な愛（エロース *ἔρως*）並びに欲望（*ἐπιθυμία*）までも、人間が神へと無限に近づいていくための原動力であるとして肯定的に言及する<sup>26</sup>。こうした彼らの婚姻観が直接的にも間接的にも、以降、東方西方共に進められていった修道制や、キリスト教の霊性全般に関わる神学的理論の整備に影響を与え、

また中世後期以降に展開していったいわゆる婚姻神秘主義の礎の一翼を担うものとなっていったことは想像に難くない。後世への波及の実態解明については、今後の課題としたい。

## 注

- 1 『新カトリック大事典』（電子版、Kenkyusha Online Dictionary）には、「エンクラティス派」の項目に「二世紀中葉以後の、シリアを中心とする禁欲主義の潮流。その名称は「克己者」の意味のギリシア語（enkratès）に由来する。思想史的には、旧約時代以来のユダヤ教におけるナジル人の伝統がシリアのキリスト教と結びついて成立したもので、特にタティアノスの与えた影響が大きい。肉食と飲酒のほか、とりわけ結婚（性交）を忌避した」とある。
- 2 ガラテヤ 5：23。
- 3 Anna Silvas, *The Mystery of Christian Marriage through the Ages* (Oregon, Cascade Books / Eugene, 2020), 110-111.
- 4 *Regulae Fusius Tractatae*, in J. Garnier and P. Maran (eds.), *Opera Omnia Sancti Patris Basili* (Paris, 1721-30; 1839 imprint republished by Migne, Paris, 1857, as *Patrologia Graeca* 29-32; 31. 890-1052). 本稿では英訳として、Anna M. Silvas, *The Asketikon of St Basil the Great*, Oxford University Press (UK, 2005)に所収のThe Longer Responseを、また邦訳として、上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成II 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年所収の桑原直巳訳「バシレイオス 修道士大規定」（182-280頁）を参照した。
- 5 *Regulae Fusius Tractatae*, 20. 2.
- 6 福音的な生き方に関して言えば、バシレイオスにとって「修道者」と「キリスト者」も必ずしも峻別されない。久松英二「カッパドキア三教父の霊性（その一）—カエサレイアのバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオス」『神戸海星女子学院大学研究紀要』45号、2006年、104頁を参照。
- 7 マルコ13：37。聖書本文は、『聖書 新共同訳（旧約聖書統編つき）』日本聖書協会に従った。

- 8 一ペトロ 5:8。
- 9 *Ascetica, Patrologia Graeca* 31. 629A. 英訳として、W. K. L. Clarke, *The Ascetic Works of St Basil* (London, SPCK, 1925), 61-62を参照。〔 〕内は本稿執筆者による。
- 10 「親しい交わり、共同体」の意味。範型は三位一体の親密な神的交わりであり、キリスト者は聖霊によって神の生命にあずかることで人間相互の交わりを実現し、共同体を形成する。『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年を参照。
- 11 ロマ 1 : 3。
- 12 創世記 2 : 24、エフェソ 5 : 31。
- 13 *Orationes* 37, 6, 7. 英訳として、William, A. Jurgens (ed.), *The faith of the Early Fathers II* (Collegeville, MN, Liturgical, 1979), 34を参照した。マタイ 19 : 1-12の解釈については、*Orationes* 37, *Patrologia Graeca* 36. 279-308に所収。
- 14 *Orationes* 37, 8. 英訳として、Philip Schaff and Henry Wace (eds.), *Nicene and Post-Nicene Fathers, Second Series, original edition* (Christian Literature Publishing Co., 1895. Reprinted Peabody, MA, Hendrickson, June 1995), 340を参照した。〔 〕内は本稿執筆者による。
- 15 *Poemata Moralia, Patrologia Graeca* 37, 539A-540A, 541A-542A, 543A.
- 16 ニュッサのグレゴリオスは独身での修道的生活に憧れを寄せつつも、自身はそれを実現し得なかったと語っている。W. Jaeger, H. Langerbeck (eds.), *Gregorii Nysseni, De Virginitate, Gregorii Nysseni Opera Ascetica Vol III-I* (Leiden, E. J. Brill, 1952), 215-343. 特に256を参照。
- 17 ところが、ニュッサのグレゴリオスはこの職に対して情熱を感じ得なかったようである。「彼は(ニュッサの)町そのものも、人々も好まなかった。そのため彼は修辞学教師仲間のスタギリウスに宛てて『ここは荒野で、荒廃しているのみだ』と語っている。そして、友人を同地に引き入れようとしていた。この頃の彼の往復書簡から察するに、彼は実に世俗的な生活を送っていたようである。また彼はその当時まだ妻と共にいたらしい—当時の慣習では(妻帯したままで主教となることが)許されていたのかもしれない。いずれにしても、彼は兄の期待に応えるような援助を行うことがで

- きず、バシレイオスを煩わせた」J. Daniélou and H. Musurillo, *From Glory to Glory. Texts from Gregory of Nyssa's mystical writings* (New York, St. Vladimir's Seminary Press, 2001), 4.
- 18 *De Virginitate*, W. Jaeger (ed.), *Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1 (Leiden, Brill, 1920).
- 19 *De Virginitate* 7, *Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1, 285.
- 20 *De Virginitate* 3, *Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1, 265, *De Virginitate* 7, *Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1, 282-284.
- 21 ニュッサのグレゴリオスの著作群において、純潔について抽象的に論じた *De Virginitate* と対をなすのが、グレゴリオスの実姉マクリナを主題に一家の家族史と霊性を論じた『聖マクリナの生涯』 *Vita Sanctae Macrinae* (*The Life of Saint Macrina, Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1, 347-414)である。久松英二「カッパドキア三教父の霊性（その二）—神秘思想の父ニュッサのグレゴリオス」『神戸海星女子学院大学研究紀要』46号、2007年、130頁を参照。*Vita Sanctae Macrinae*を中心に、グレゴリオスの「純潔」理解について論じた拙稿 *Macrina the "Philosopher" and the Role of Women in Early Christianity: Gregory of Nyssa's View on Women, Contribution of Women to Con-viviality: In/Ad Spiration to Convivials* (Kyoyusha, 1993), 47-69も参照。
- 22 *De Virginitate* 20, *Gregorii Nysseni Opera* Vol III-1, 312.
- 23 *In Canticum Canticorum*, H. Langerbeck (ed.), *Gregorii Nysseni Opera* Vol VI (Leiden, E. J. Brill, 1960). 邦訳として、大森正樹、宮本久雄、谷隆一郎、篠崎榮、秋山学 訳『ニュッサのグレゴリオス 雅歌講話』新世社、1991年。
- 24 人間霊魂と教会のどちらを強調するかに違いは見られるが、オリゲネス以降中世にかけてこのような雅歌解釈を行った人物として、ニュッサのグレゴリオスの他に、オリュンポスのメトディオス（3世紀）、ミラノのアンブロシウス（c. 339-397）、大グレゴリオス（540-604）、サン・ティエリのギョーム（c. 1085-1148）、クレルヴォーのベルナルドゥス（c. 1090-1153）などの名をあげることができる。雅歌解釈の歴史については、宮本久雄『愛の言語の誕生—ニュッサのグレゴリオスの「雅歌講話」を手がかりに

一』、新世社、2004年、第二章231-277を参照。

- 25 『雅歌講話』においても、グレゴリオスは神と人間との一致を「神聖なる婚姻θεῖος γάμος」と表現している。In *Canticum Canticorum*, or. 1, *Gregorii Nysseni Opera* Vol VI, 15.
- 26 ニュッサのグレゴリオスによる、人間の神へと向かう脱自的な無限の前進上昇運動と、その推進力である愛に関する詳細な分析は、久松、前掲書、2007年、150-152頁を参照。

※本研究は、JSPS科研費20H01191の助成を受けたものである。